『幻を追う人』読解のこころみ (7)

井　上　三　朗

目　　次

1．はじめに
2．欲望の世界
3．死の魅惑と恐怖
(1)　マリー＝テレーズの死の想念
(2)　プラス夫人の不幸への愛と死への歩み
(3)　マニュエルの死の想念と恐怖
(4)　死の城の住人たち
a．伯爵
b．ジョルジュ夫人
c．アントワーヌ
d．子爵夫人
e．作中人物としてのマニュエル
(5)　まとめ
4．結び

（太字は今回掲載分）[89]

3．死の魅惑と恐怖

(4)　死の城の住人たち

さて今度は、いよいよ『在り得たこと』を死の観点から分析することにしよう。マニュエルにとって、『在り得たこと』の作成は、一つには、死の恐怖の克服のこころみの一環としてあるとみなしうる。したがって、物語はマニュエルの現実生活から遊離したメルヘン的なものにはならない。欲望の苦しみからのがれるために、マニュエルが『在り得たこと』の中で自らの欲望を表出したのと同じように、死の恐怖から脱却するためには、死ぬという、人間に課せられた条件を真正面から凝視する必要があるのだ。それゆえ、『在り得たこと』の舞台となるネーグルテールの城は、ジャック・プチがみなしているように、

必然的に「死の城」となる。『在り得たこと』の世界は、欲望の世界であると同時に死の世界でもあるのだ。以下において、私たちはネーグルテールの城を死の城たらしめている原因を説明するとともに、城の住人たちが死に魅せられるありさまを、また、いかなる仕方で死と向かいあっているかを見ていきたい。そのことのために、伯爵、ジョルジュ夫人、アントワーヌ、子爵夫人、マニュエルという順番で、作中人物たちの在り方を死の主題とのかかわりで検討することにしたい。

a．伯爵

ネーグルテールの城が死の城となることには、蟄居して死を待つ伯爵の存在が大いに関係している。マニュエルは伯爵が蟄居するにいたった事情を、以下のように語っている。

「秋の日の或る朝、散歩から帰る途中で、彼［伯爵］は胃の一箇所に、死が指を置くのを感じた。死が力を押しつけ、彼は苦痛をおぼえた。その時、彼は五十二歳だったが、三十歳のころからこの合図を待っていたのだ。最初に感じたのは、激しい恐怖感だった。だが同時に、内心の声は、「ようやく来た！」と叫ぶのだった。

(…)

彼は子どもたちを遠去けることからはじめ、まる一年のあいだ、どうしても離れる決心のつきかねた城の中で、ほとんど一人きりで暮らした。その間、死は相変わらずなかなか訪れてこなかったし、苦痛も幾分和らぎさえもしたので、彼は娘と息子を呼びもどした。そして自分は小さな部屋に閉じこもり、もはやそこから出ることはなかった」(*Ce qui*, pp.336−337)。

ここでは、伯爵が死の兆候をおぼえて、蟄居するようになった事情が述べられている。伯爵が子どもたちにいかなる影響をおよぼしたかについて議論するのはあとまわしにして、伯爵が死の兆しを知覚したときの反応をみておくことにしよう。「最初に感じたのは、激しい恐怖感だった」と書かれているごとく、伯爵は死の恐怖の感情にとらえられている。しかも、「三十歳のころからこの合図を待っていたのだ」とあるとおり、伯爵は長らく死に魅せられて生きてきた。その理由は、次の引用文からわかるように、ネーグルテールの一族が遺伝性の疾患を背負っているからだ。ともかく、上の文章からは、伯爵における、死の魅惑と恐怖が読みとれるのである。

伯爵の蟄居の経緯(いきさつ)は、子爵夫人の口をとおしても説明されている。子爵夫人は、自分の命令に従って伯爵にラテン語の祈禱文を朗読するという務めを果たしたマニュエルに、こう言っている。

「(…) わたしたちの一族では、男たちはほとんどいつも同じ仕方で死ぬのだということを知っていただかなくてはなりません。それも恐ろしい仕方で死ぬのです。わたしの存じあげているかぎりでのあなたなら、もしその恐ろしさを描写したら、とても耐えられないだろうと思いますよ。でも大丈夫、何もこわがることはありません。神さまのおかげで、今までわたしたちに勇気が欠けたことはありません。でも病気に立ち向かう力がたたかいをひきのばし、苦しみを倍加させるのです。二年前、父が最初の兆候を感じたとき、それまで送ってきたかなり幅広い生活から身をひいてしまいました。暮らしぶりも必要最小限に切りつめて、父はもはや誰とも付き合わず、あなたがごらんになったあの部屋のなかに永遠に閉じこもることに決めたのです」(*Ce qui*, p. 331)。

子爵夫人は、はじめのほうで、一族の男たちが恐ろしい仕方で死ぬのだと話している。そしてその死に方の恐ろしさを描写すれば、マニュエルには耐えられないだろうと付け加えている。子爵夫人のことばを考慮すると、遺伝的な病いの最初の兆候を感じたことでの伯爵の蟄居は、死に魅せられ、あるいは死の恐怖にかられたうえでの行為であることが察知できる。また、部屋に閉じこもった伯爵を待ちうけるものが、死もしくは死の恐怖とのたたかいであり、もはや死の想念しか彼の意識を支配しないことが推測される。このことは、ラテン語の祈禱書を朗読し、いっしょに夜を明かしたマニュエルに、伯爵が、「娘に、まだ今日のことではないようだと伝えておくれ」(*Ce qui*, p.324) と言っているところからも明らかである。「まだ今日のことではないようだ (ce ne sera pas encore pour aujourd'hui)」という文の主語 (ce) が<死> (la mort または ma mort) であることは指摘するまでもない。伯爵はただひたすらに自らの死に思いをはせ、死の訪れを待ちうけている。換言すれば、もっぱら死の想念に支配されて生きつづけているのである。

伯爵が身を置く状況は、現実生活においてマニュエルが置かれた状況と重なりあう。実際、ラ・コンブの森への散歩ののちの、マニュエルの蟄居生活は、死の訪れを待つだけの生活にほかならない。伯爵と同じように、マニュエルは閉ざされた世界のなかで死の想念とともに生きているにすぎない。マニュエルじしん、伯爵が身を置く状況が自分の置かれた状況に類似していることを自覚している。マニュエルは、伯爵のためにラテン語の祈禱文を朗読する場面をふりかえりながら、あるいは想像しながら、次のように書いている。

「時折、夜が明けようとしているあいだに、自分がネーグルテールの塔の中にいて、瀕死の男のそばでラテン語を朗読しているとは、信じることができなくなった。しか

しよく考えると、この状況はぼくには当然のことのように思われた。というのも、ぼくには説明しがたい仕方で、<この状況がぼくには似つかわしかった>[90] からだ」(*Ce qui*, p.322)。

この一節では、「この状況がぼくには似つかわしかった」と言われていることが注意をひく。「この状況」とは、「瀕死の男」、言いかえれば、危篤の病人が誰かに寄りそわれているという状況である。このような状況が「ぼくには似つかわしかった」とマニュエルがみなすのは、現実生活の場で、マニュエルがプラス夫人に付き添われて病い＝死とたたかっているという状況にこの状況が似ているからだと思われる。ジャック・プチはこの文をもんだいにしつつ、「場面は一種の二重化でありうるだろう」[91] と註釈している。「二重化」(dédoublement) とは、現実生活における場面を想像世界の中に移しかえたもの、という程の意味であろう。ジャック・プチは、現実生活におけるマニュエルの状況と伯爵の状況との重なりあいを前提にして註釈している。ネーグルテール伯爵とは、『在り得たこと』の作者であるマニュエルの分身であり、現実世界に身を置くマニュエルの内心の死の魅惑と恐怖を形象化したものとみなすことができる。

伯爵の蟄居生活の模様をもう少し見ておくことにしよう。『在り得たこと』において、伯爵が病いの進行にともなって、いっそう狭い部屋に移ったことが語られている。

「病人の習慣には変わったことは何もなかった。ただ、より小さな、古い城壁の切り込みの中にあるがゆえに、いわばいっそう保護された部屋に、彼が移してもらったという点を除けば。そこはかつては女の寝室で、老人の奇妙な気紛れから、板張りやペンキ塗りの部分や窓にいたるまで、すべてが赤い緞子で覆われてしまった」(*Ce qui*, p.338)。

この文章で二つの点が注目される。一つは、伯爵が移った、より小さな部屋が「いわばいっそう保護された」(comme mieux abritée) と形容されている点であり、もうひとつは、部屋が伯爵の意向によって「赤い緞子」で覆われたという点である。この二つの点について少し考察してみたい。まず、「いわばいっそう保護された」という修飾語にかんしてであるが、部屋はいったい何から「保護され」ているのであろうか。それは当然のことながら、死からであり、死の訪れからであり、あるいは死の危険からである。かくして伯爵の小さな部屋は、彼を死からまもる一種の安全地帯、避難場となる。では、伯爵が部屋を覆わせた「赤い緞子」はどのように考えたらよいのであろうか。伯爵の部屋の

赤さは、別のところでは、カーテンの描写というかたちをとって、「乾いたばかりの血の色を連想させる、鈍い赤の、この重たくて、ざらざらとした生地」(*Ce qui*, p.326) といったように表現されている。ここでは、カーテンの生地の赤さが、「乾いたばかりの血の色」になぞらえられている。部屋を装飾する<赤>は、伯爵の体内を流れる血と対応し、伯爵の生命力を象徴しているのではないだろうか。もっとも、ここでの<赤>は「鈍い」(assourdi) という形容詞を従えているところからわかるように、鮮烈な色ではない。それゆえ、<赤>の色彩が伯爵の生命力を表徴するといっても、その生命力は旺盛なものではない。死を間際にして、いまなお残っている弱々しいものにすぎない。とはいえ、このような分析を踏まえると、伯爵がより小さな部屋に移り、赤い緞子で部屋を覆わせるという事実は、伯爵の生への執着をかいま見せているのではないだろうか。伯爵は死と対峙しながらも、生きることへの意欲を依然として保ちつづけているのである。

伯爵の生きることへの意欲は、掛時計をみつめるという行為からもうかがえるのではないだろうか。伯爵は子どもたちとの面会を拒否したあと、もっぱらジョルジュ夫人の看護を受けて闘病生活をおくることになる。だが、ジョルジュ夫人は子爵夫人の命令にしたがって、伯爵に口をきかない。そこで伯爵は掛時計の位置をかえさせ、掛時計をみつめることによって時をすごすのである。この件りを読むことにしよう。

「彼［伯爵］はジョルジュ夫人の親切に頼らなくても時刻を知り得るように、部屋にあった飾り枠付き掛時計の位置を変えさせた。そのことのほかには、もう何一つ要求しなかった。やがて文字盤と針の歩みとが彼を魅惑し、そのおかげで一日を過ごすことができるようになった。こののち、彼には、自分の全生涯がこの小さなローマ数字の環のなかに刻みこまれているように思われた。そして苦痛の感じられない時間は、彼に一種の至福をもたらした」(*Ce qui*, pp.339−340)。

伯爵は掛時計の「文字盤と針の歩み」に魅惑され、それらをひたすら凝視することによって生きのびている。もしくは死とたたかっている。そして「苦痛の感じられない時間」には、伯爵は「一種の至福」さえもあじわっている。ここから、掛時計の凝視は、伯爵の生きることへの意欲を証(あか)しているとみなせよう。伯爵は死の危機にさらされ、死の訪れを静かに待ちながらも、なおも生への執着をいだいている。私たちは先に、伯爵における死の魅惑と恐怖を指摘した。この死の魅惑と恐怖は、今もんだいにしている生への執着を前提としており、これと裏腹の関係にあるといえよう。生きることへの意欲が伯爵の中にあ

るからこそ、死が彼を魅惑することになるのだし、死の恐怖が生じ、いやますのだと考えられるのである。

さて、このように生きることへの意欲をもつとはいえ、閉ざされた部屋に蟄居し、死の訪れを待つという伯爵の在り方は、他者の目からみれば、死と馴れ合ったもの、死と同化したものに等しいのではないだろうか。マニュエルにとって、伯爵は「生きながらにして閉じこめられた」人である（*Ce qui*, p.339）。しかも伯爵が閉じこめられた世界は、小さな世界＝部屋であり、「より大きな部屋の内部にこしらえたごく小さな部屋」（*Ce qui*, p.326）にすぎない。伯爵が身を置く世界は、部屋の中の部屋であるような、きわめて限定・縮小された世界である。そのような世界に「閉じこめられた」伯爵は、生きながらにして、すでに死んでいる存在に等しいし、生者というよりも、死者同然の存在だとみなしうる。このことは、伯爵に関する次の記述からもたしかめることができる。

「憐憫、心配、次いで不快、ついには嫌悪の念をいだかせた挙句、彼はあたかも、存在するということが合理的には説明することができない何者かに変貌し、生の中で、死者たちの恐ろしい威光を享受しているかのようであった」（*Ce qui*, p.346）。

伯爵は闘病生活のなかで、不可解な・不合理な存在へと変貌し、「死者たちの恐ろしい威光」（prestige effrayant des morts）を放つにいたっている。他者の目から見れば、閉ざされた空間で死を待つ伯爵は、すでに死の領域に足を踏み入れた存在なのである。この点に関連して、ジャン＝ローラン・プレヴォーは、「生きながらえたおかげで、彼［伯爵］はいわば二つの世界、目に見えるものの世界と目に見えないものの世界との境界に位置している」[92] と述べている。ここで言われている「目に見えるものの世界」とは、現実世界、生者たちの世界であり、「目に見えないものの世界」とは現実世界の彼方または背後に存在する死者たちの世界、もしくは死の世界を意味すると思われる。伯爵は生きてはいるが、死と対峙し、死とたたかうがゆえに、死の神秘に通暁し、死の世界の入り口に立っていると、プレヴォーは考えるのであろう。そしてまた、そうであるがゆえに、伯爵は生と死との境い目に、生（者）の世界と死（者）の世界との境界に位置しているとみなすのであろう。このような見解をうけいれると伯爵は生者たちにとっては、当然、「死者たちの恐ろしい威光」を放つ存在となり、死と同化した存在と化す。ネーグルテールの城の他の住人たち、すなわち、アントワーヌ、子爵夫人、それにマニュエルが死に魅せられ、死の恐怖にとらえられる原因として、あるいは、ネーグルテールの城を死の城たらしめる要素として、こうした伯爵の存在が第一に挙げられるのである。

b．ジョルジュ夫人

ネーグルテールの城が死の城となるという事実には、もうひとりの人物の存在が寄与しているのではないだろうか。すなわち、ジョルジュ夫人の存在である。そこでジョルジュ夫人の在り方を検討することにしたい。マニュエルがネーグルテールにやってきた時点では、ジョルジュ夫人は伯爵を看護する仕事を与えられている。しかしこの仕事をひきうける以前には、ジョルジュ夫人は長らく低い身分、召使の地位にあった。このことは、「脂肪のために重たくなった彼女［ジョルジュ夫人］の顔は、召使の身分のなかで年老いてしまった者たちに特有の重々しさを帯びていた」（*Ce qui*, p.325）という描写からわかる。けれども、ジョルジュ夫人は召使の地位に満足するような人間ではない。マニュエルはジョルジュ夫人の境遇を、こう書きしるしている。

「彼女がネーグルテールで暮らしはじめてから、五年以上経っていた。そして彼女がここの生まれだと聞いて、ぼくは驚くのだった。それどころか、彼女と子爵夫人とは同じ乳母、すなわちジョルジュ夫人自身の母親の乳を吸ったのである。この事実から、ジョルジュ夫人が、ほんのちょっとネーグルテール家の人びとのいとこにあたると思っていることを、ぼくは疑わなかった。しかしそれにもましてぼくを驚かせたのは、彼女の年齢とぼくの女主人の年齢とのあいだに、一週間のへだたりもなかった[93]ということである」（*Ce qui*, p.333）。

ここでは、子爵夫人が赤ん坊のとき、ジョルジュ夫人の母親の乳を吸ったことが語られている。しかも、子爵夫人とジョルジュ夫人との年齢が一週間の違いもないことから、二人がジョルジュ夫人の母親によって、双子の姉妹のように育てられたことが想像される。このような事情を踏まえて、マニュエルは、「ジョルジュ夫人が、ほんのちょっとネーグルテール家の人びとのいとこにあたると思っている」と推測するのである。この推測から、ジョルジュ夫人が身分向上の野心をいだき、その機会をつけねらっていたことがうかがえる。ジョルジュ夫人の上昇志向は、子爵夫人の次のような話によっても示唆されているように思われる。

「あの女［ジョルジュ夫人］がここにやってきたとき、父は元気でした。私たちは、あの女が自分の家にいることさえ知りませんでした。お城の地下室に隠れて、石炭袋の下にある穴の中で眠っていたのです（…）。つつましさがあの女を救いました。彼女は待つすべを、その方法は知りませんが、少しずつ上がるすべを心得ておりました。（…）一段一段と登っていって、父の居る部屋までたどり着いたのです」（*Ce qui*, pp.369－370）。

子爵夫人は、ジョルジュ夫人がはじめは城の地下室にいたけれども、一段一段と階段を上がって、ついに伯爵の部屋にまで達したと言っている。ジョルジュ夫人の、この文字どおりの上昇は、彼女の上昇志向を象徴的に表現しているのではないだろうか。「彼女は待つすべを、(…) 少しずつ上がる[94]すべを心得ておりました」という証言からは、ジョルジュ夫人の秘められた野心がはっきりと読みとれるのである[95]。

こうして、ジョルジュ夫人は伯爵の世話をするという仕事を獲得する。ただ、この仕事は、作中、子爵夫人がジョルジュ夫人の「機嫌をとっ」て、「病人の看護というつらくて嫌な仕事」(*Ce qui*, p.338) をひきうけさせたと説明されているように、必ずしも楽しいものではない。だがこの仕事を得ることによって、ジョルジュ夫人は召使たちとは違った待遇をうけることになる。このことは、マニュエルが伯爵のためにラテン語の祈禱書を朗読するという仕事を与えられてからの待遇の変化を、「ぼくはもう台所で食事をするということはなく、調理場に隣接した明りのない、さびしい小部屋で、ジョルジュ夫人と共にするのだった。こうしてぼくは、主人たちと召使たちとの中間に位置することになった」(*Ce qui*, p.332) というふうに書いているところから明瞭である。マニュエルは新たな勤めを果たすことで、自分が「主人たちと召使たちとの中間に位置することになった」と認識している。マニュエルは主人たち、つまり伯爵や子爵夫人らと対等の地位に立ったのではないとしても、台所で召使たちといっしょに食事をしなくなったことから、召使の地位を脱したと考えている。同じことは、ジョルジュ夫人についてもいえよう。伯爵を看護するという任務をひきうけることで、ジョルジュ夫人は他の召使たちとくらべて、上位に立つことになるのである。

ジョルジュ夫人の地位の向上ということと関連して、もう一つ見落としてはならない重要な事実がある。それは、ジョルジュ夫人が、死の間際にある伯爵に接することができる唯一の存在であるという点である。なるほど、マニュエルは伯爵のために祈禱文を朗読するという役目をひきうけるので、伯爵をみている。しかしこの仕事は結局一度しかなされない。それゆえ、基本的には、ジョルジュ夫人だけが、病いの床にある伯爵を看取っているとみなしうる。子爵夫人はジョルジュ夫人について、「あの女はその部屋［父の居る部屋］の中に、父といっしょに閉じこもってしまいました。あの女をのぞいては、もはや誰もその中に入ることができません」(*Ce qui*, p.370) とマニュエルに語っている。子爵夫人の口調には、伯爵といっしょに居ることができるジョルジュ夫人にた

いする羨望の気持ちがこもっているように思われる。伯爵の看護という仕事を自分が与えたにもかかわらず、父親からは自分が面会することは禁じられているので、子爵夫人の目には、ジョルジュ夫人は特権的な地位にあるようにうつっているのである。

このように特権的な地位にあるジョルジュ夫人は、しかしながら、周囲の者たちに嫌悪感をいだかせている。子爵夫人はマニュエルに、「あの女［ジョルジュ夫人］はわたしの召使たちに嫌悪を催させていました」(*Ce qui*, p.369) と言い、また、「あの女は醜いのです。もちろんわたしはあの女よりも醜い召使を知ってはいますが、これほどまでにはわたしに嫌悪の念をいだかせませんでした」(*Ce qui*, p.368) と告白している。マニュエルもまた、ジョルジュ夫人を知ったばかりのころ、嫌悪感をおぼえている。

「ジョルジュ夫人の微笑を浮かべているが断乎とした顔つきを前にして、ぼくは激しいと同時に冒瀆的ないくつもの言葉を吐きたい気持ちにかられた。(…) この女をみたときの、ぼくの最初の嫌悪の反応は、おそらくこの上もなく正当なものであっただろう」(*Ce qui*, p.327)。

マニュエルはジョルジュ夫人に向かって、「激しいと同時に冒瀆的な」言葉を吐きたい衝動にかられている。それは、マニュエルが夫人にたいして反撥の感情をいだいたからにほかならない。では、この反撥感、あるいは、周囲の者たちがおぼえる嫌悪感は、何に由来するのであろうか。結論的に言えば、これらの感情は、ジョルジュ夫人が生のただ中ではなく、死と隣接したところに、否、死の領域の中に身を置いていることから生じたものとうけとれる。実際、ネーグルテールの城にやってきた当初の、地下室でのジョルジュ夫人の暮らしは、陽のあたらない暗闇の中での生活であるがゆえに、まったく生気を感じさせないし、臨終の床にある伯爵の部屋に入ってからは、ジョルジュ夫人はまさしく死と隣り合ったところで、というより、死の世界の中で棲息しているとみなすことができる。ジョルジュ夫人が周囲の者たちの心に植えつける反撥と嫌悪の感情は、ジョルジュ夫人が死を連想させることに起因している。そしてジョルジュ夫人は、死との結びつきを深めることで、死じたいがもたらすような恐怖感を人びとにいだかせ、死そのものが持ちうるような魅惑の力を行使するようになる。子爵夫人はマニュエルに言っている。

「あの女［ジョルジュ夫人］はわたしよりも強いので、もう追いはらうことはできません。父が亡くなったら、あの女は誰か別の人の枕もとにやって来て腰をすえることでしょう。あの女は、あれをもっとも恐れている者たちをあらがいがたく惹きつける

のです。まずわたしの弟を、それからこのわたしを……」(*Ce qui*, p.370)。

子爵夫人は、自分が弟アントワーヌと同様に、ジョルジュ夫人を恐れつつも、ジョルジュ夫人に惹かれていること、言いかえれば、魅せられていることを認めている。それはなぜか。もちろん、ジョルジュ夫人が死の属性をもつからである。このことは、伯爵が息をひきとったら、ジョルジュ夫人は臨終の床にある他の者の枕もとに居すわることになると子爵夫人が考えているところから明らかである。このような特権を有するのは、死そのもの以外にはない。死が病いにふせる者を訪れるのと同じように、ジョルジュ夫人は死に瀕した者に近づくのだと子爵夫人は思っているのである。こうして子爵夫人の脳裡では、ジョルジュ夫人は死と同一化される。「一、二度、わたしはあの女がそれ自身、死なのではないかと自らに問うたことがあります」(*Ce qui*, p.369) と子爵夫人はマニュエルに語っている[96]。子爵夫人にとって、ジョルジュ夫人は死を体現した存在なのである。この見方はマニュエルもまた共有しうるものであり、普遍的な見方であろう。ミシェール・ラクロはジョルジュ夫人について、こう論じている。

「この、人に気に入られない、愚かしい女は、奇妙にも嫌悪の念と恐怖とを人にいだかせている城の中にあって、一切のものを支配しているが、とりわけ、死に瀕した伯爵の運命を完全に支配しておくことが許されている。それで彼女だけが、もはや誰も入り込むことができない部屋の中で、断末魔の苦しみの進行をたどることができる。この謎めいた人物を解く鍵は、明らかに彼女が人びとにいだかせる説明しがたい恐怖の中に存する。実際、ジョルジュ夫人は死の化身なのだ」[97]。

ミシェール・ラクロは、ジョルジュ夫人が臨終の床にある伯爵の運命を完全に掌握していること、周囲の人びとに「説明しがたい恐怖」を感じさせていること、この二つの理由から、夫人が「死の化身」だと断定している。作者グリーンもまた、1954年11月26日付の『日記』の中で、「『幻を追う人』において、私は死からある人物を、かなり控え目で、生気のない肉づきをした、ほとんどもの言わぬ女性を作り上げた」[98] と書いている。ここで問題になっている女性がジョルジュ夫人であることは疑いを容れない。ジョルジュ夫人が死を形象化した人物であることは、作者グリーンの証言からも確認することができる。

『在り得たこと』の一人物であるこのジョルジュ夫人は、マニュエルが身を置く日常生活の中の、どの人物と対応しているのであろうか。マニュエルはいったい、どの女性をモデルにしてジョルジュ夫人を創造したのであろうか。この点にかんして、アントワーヌ・フォンガロは次のように述べている。

「恐るべきジョルジュ夫人は、おそらくは死の化身であるこの不可解な家政婦は、プラス夫人の召使であるレオンティーヌの分身以外の何ものでもない。レオンティーヌはいつも無口ではあるが、マニュエルの秘密を発見し、それゆえに彼にとっては恐ろしい存在であるからである」[99]。

アントワーヌ・フォンガロは、ジョルジュ夫人のモデルが料理女のレオンティーヌであると考察している。その理由は、この二人がどちらも人に仕える身であり、そして共に恐ろしい存在であるという点に存する。しかしながら、この二人の人物の恐ろしさはレベルが違うのではないだろうか。ジョルジュ夫人の恐ろしさは、アントワーヌ・フォンガロも彼女を「死の化身」とみなしているように、死の属性をもつことから由来している。これにたいして、レオンティーヌの恐ろしさは、たかだかマニュエルの秘密を、つまり彼がマリー＝テレーズを連れて夜の散歩に出かけたという事実を知っていることに原因しているにすぎない。ニコラス・コスティスもまた、アントワーヌ・フォンガロの解釈を批判している。

「ジョルジュ夫人は、マニュエルがレオンティーヌともった関係から生じているかもしれないけれども、彼女は死の化身以外の何ものでもないという点において、レオンティーヌと根本的に異なっている」[100]。

ニコラス・コスティスは、ジョルジュ夫人が死の化身であるという点に、夫人とレオンティーヌとの間の決定的な差異を認めている。けれどもコスティスは、ジョルジュ夫人が、マニュエルの、レオンティーヌとの関係から生まれたかもしれないと譲歩している。はたしてそうなのであろうか。ジョルジュ夫人は、レオンティーヌではなく、プラス夫人との関係から生まれたのではないだろうか。プラス夫人は闘病生活に入ったマニュエルに終始付き添い、彼を看護している。マニュエルとプラス夫人とのこの関係は、伯爵とジョルジュ夫人との関係に類似している。死に瀕した伯爵がマニュエルの分身とみなされるのと同じように、ジョルジュ夫人は、死の間際にあるマニュエルに執拗に寄り添うプラス夫人に対応する人物であり、プラス夫人をモデルにして想像＝創造されたと考えられるのである。ジョルジュ夫人と同様、プラス夫人もまた、死と馴れ合って生きる。ついには死と同化する。ただ、プラス夫人は、ジョルジュ夫人のように死の化身とみることはできない。プラス夫人においては、存在の不安や死の恐怖が想定されるし、死を肉体化したジョルジュ夫人からは、死の恐怖などといった人間的な感情は観察されない。とはいえ、ジョルジュ夫人が、死と馴れ合って生きるプラス夫人の延長上に位置することはたしかなように思

われる。

いずれにせよ、臨終の床にある伯爵にくわえて、このように死を体現するジョルジュ夫人が存在することで、ネーグルテールの城は死の城としての性格をいやますことになる。ジョルジュ夫人は、ネーグルテールの城がいっそう死の魅惑を行使し、住人たちにいっそう死の恐怖をふきこむことに貢献しているのである。

c．アントワーヌ

次に、伯爵の息子であるアントワーヌの在り方を検討することにしよう。父親が病いの床についたとき、アントワーヌは学業を終えようとしていた。アントワーヌは監視のゆるみを利用して、しばらく自由を満喫する。しかしアントワーヌは毎朝、伯爵に面会しに行かねばならず、しだいに死の恐怖にとりつかれていく。

「彼［伯爵］は、息子が自分を恐れていることを非常によくわかっていた。それも、自分が言うかもしれないことや、自分の不機嫌や叱責ではなく、自分がはらわたの中にもち、おそらくは息子に遺伝したであろう病いを恐れていることを。この点については、二人は一致して沈黙をまもっていた[101]。だが若者の恐怖は、月日のたつにつれて、ますます抗しがたいものになっていった。アントワーヌは、この世のあらゆる勇気も、一人の男が苦しむのをふせぎきれないことを、その目でみてとった。そしてあまりよく鍛えられていない彼の精神はついに、とても高い家から下に身を投げるように、恐怖に身をゆだねるのだった。いつか、父親と同じように生を終えなければならないという思いが、そのとき、彼の脳裡を支配したのである」（*Ce qui*, p.337−338）。

アントワーヌは父親の病いの遺伝性を意識して、自分もまた、「父親と同じように生を終えなければならない」という思いにとらえられている。そして「あまりよく鍛えられていない彼の精神はついに、とても高い家から下に身を投げるように、恐怖に身をゆだねるのだった」と書かれているように、死の恐怖に支配される。また、別のところでは、一族の遺伝的な病いに思いをはせるアントワーヌが、「常に覚醒している想像力にたいして無力だった」（*Ce qui*, p.341）と説明されている。この説明からは、遺伝的な病いにかんして際限のない想像をめぐらせて、不安と恐怖に圧倒されるアントワーヌの姿がうかがえる。

こののち、アントワーヌは父親の同意を得て、異国への旅に出る。そして放蕩にふける。このような脈絡のなかでとらえるならば、アントワーヌの放蕩は、欲望の充足のためというより、死の恐怖をまぎらせ、克服するためのこころみと解される。けれどもアントワーヌはやがてネーグルテールの城に呼びもどさ

れ、ふたたび、死と対峙する伯爵を見舞わなければならなくなる。それで以前と同じように、死の恐怖におそわれる。

「ぐずぐずするうちに数ヵ月が経った。その間、この上もなく残酷な苦しみを毎日目にしたことが、アントワーヌの精神に影響をおよぼした。遅かれ早かれ同じように死ぬだろうという恐れは、今からすでに自分が病いに冒されているのではないかという疑いに席を譲った。(…) ある夜、父親の枕もとにいるとき、彼は不意に嗚咽しはじめ、絶望の大きな叫び声をあげて、自分もまた同じように死ぬだろう、もう病いがはじまっていて、数週間まえからそれを感じていると父親に告げた。実のところ、彼の病いは、この上もなく月並な肝臓の発作以外のものではなかった」(*Ce qui*, p.342)。

死の恐怖が高じて、アントワーヌは、すでに父親と同じ病いに冒されており、父親と同じように死ぬのだという強迫観念にとりつかれている。この強迫観念と、父親を前にしての啜り泣きは、アントワーヌがいかに死の恐怖にたいして無力であり、いかに死の恐怖に翻弄されているかを、如実に示している。

アントワーヌの嗚咽する姿を目のあたりにした伯爵は、以後子どもたちの面会を拒絶し、完全な蟄居生活にはいることになる。一方、父親に死の恐怖をさらけ出し、自分の弱さを見せてしまったアントワーヌは、父親の完全な蟄居ののち、すっかり変貌する。

「アントワーヌは、父親の見舞いに行く義務から解放されると、かなりすみやかに病いから回復した。だが彼は変わった。恐怖が彼を別の人間にしてしまった。恐怖が彼を成熟させたとも言いうるだろう。というのも、彼の年齢には当り前の無頓着さが、厳しい、集中した重々しさに席を譲ったからである」(*Ce qui*, p.343)。

死の恐怖がアントワーヌを成熟させ、無頓着な人間から重々しい人間に変えたことが語られている。けれども、アントワーヌは苦悩から抜け出たのであろうか。父親の断末魔の苦しみを見る義務をまぬかれ、「恐怖が彼を成熟させた」としても、アントワーヌは死の想念、死の恐怖から解きはなたれるのであろうか。答えは否であろう。アントワーヌにそなわった「厳しい、集中した重々しさ」が示唆しているように、変貌ののちも、死の想念が彼の意識を支配し、彼は死の恐怖とともに生きるのだとみなすべきではないだろうか。死はますますアントワーヌを魅惑するようになるのだと考えるべきではないだろうか。

このことは、伯爵の完全な蟄居ののち、アントワーヌが外国に滞在していたときと同じように、放蕩に身をゆだねる[102]ことから明らかである。前述のように、アントワーヌにおける放蕩は、死の恐怖をまぎらせ、克服するためのこころみとうけとれるからだ。また、アントワーヌの荒々しさ (brutalité) も

しくは凶暴さ（violence）もまた、死の恐怖との関連でとらえることができるのではないだろうか。ここで、アントワーヌの在り方、性格を特徴づける彼の荒々しさ・凶暴さを見ていくことにしたい。アントワーヌの荒々しさ・凶暴さは、酩酊状態の中でジョルジュ夫人を追いかけまわすといった行為からうかがえる（*Ce qui*, p.343）。とはいえ、何と言っても、マニュエルにたいする二度の暴力をとおして、それは認められる。マニュエルへの暴力については、子爵夫人のサディスム的欲求を検討したときに少しふれたことがあるが、最初の暴力の場面をここでみておくことにしよう。

「ある晩、（…）栗林の小径を小走りにしていたとき、ぼくは、じっと立っている二人の人物にぶつかった。二人はおそらくぼくが近よる足音が聞こえなかったのであろう。ぼくがあやまろうとしたとき、げんこつの一撃がぼくを地面にころがした。ぼくは大変おそれおののいて、子爵夫人の弟のアントワーヌの姿を認めた。彼は、ぼくが誰であるのか見ようとして身をかがめた。が、わからなかったので、ぼくの顔の上に荒々しく指をはわせた。<お前が誰であろうと、俺の名前を口にしたら、たたきのめしてやるぞ>と彼はぼくの耳の中に言い放った」（*Ce qui*, p.313）。

アントワーヌは小径でぶつかったマニュエルを、げんこつの一撃で地面にたおしている。マニュエルはのちに、アントワーヌの暴力が、同行していた子爵夫人のそそのかしによるものと考えるにいたるけれども、この場面がアントワーヌの荒々しさ・凶暴さを明るみに出していることは言うまでもない。アントワーヌの荒々しさ・凶暴さは、マニュエルへの暴力行為だけではなく、「お前が誰であろうと、俺の名前を口にしたら、たたきのめしてやるぞ」という激しい威嚇の言葉からも浮かび上がってくる。

アントワーヌの暴力はいったいどのように解すべきであろうか。この点にかんして、アントワーヌがマニュエルを、誰だかわからずになぐっていることが注目される。したがって、アントワーヌの暴力はマニュエルその人にたいする怨恨にもとづくものではない。それは誰にたいしてもふるわれるような性質のものである。私たちは前にこの場面をもんだいにした際、アントワーヌにマニュエルをなぐるようにそそのかした子爵夫人のうちに、サディスム的欲求をみた。しかしアントワーヌじしんは、サディスム的欲求にうながされて、マニュエルを地面にたおすのであろうか。そうではないように思われる。アントワーヌの暴力は、死の恐怖をいだいて苦しまなければならないことへの報復手段と考えられるのではないだろうか。アントワーヌの荒々しさ・凶暴さは、欲望の屈折したあらわれとしてあるのではなく、死の恐怖によってつちかわれたものとみ

なされるのではないだろうか。

マニュエルはもう一度、アントワーヌと出会うことになる。ネーグルテールの城をかこむ森の中に散歩に出かけたとき、マニュエルは馬に乗ったアントワーヌに遭遇するのである。マニュエルは、近づいてきた馬が後ろ脚で立ったので、よろめき、地面にたおれる。アントワーヌは、「誰がお前に、こんなところをうろつくことを許したのだ？」と問い、「立って、こっちへ来い」(*Ce qui*, p. 355) と命じる。だがマニュエルが命令に従わないので、アントワーヌは、「鞭の先でお前をひっぱたけたら、ちょっとした死がどんなものか、教えてやれるのだがな」(p.356) と言い放つ。この脅しから、アントワーヌの荒々しさ・凶暴さが読みとれる。と同時に、「ちょっとした死」(la petite mort) という言葉を用いている点から、アントワーヌが死の想念にとりつかれていることがうかがえる。さらには、アントワーヌの暴力が死の恐怖と関連していることが察知される。つまり死の恐怖で苦しまねばならないことへの報復として、他者に苦痛、ひいては死の恐怖を味わわせたいという願い、言いかえれば、他者の内心に死の恐怖を植えつけることでそこからのがれ出たいという願いに、彼の暴力はもとづいているように思われるのである。

アントワーヌは立ち去る間際、馬の鞭でマニュエルの頬を打ち、マニュエルに手ひどい傷を負わせることになる。ところで、そこに至るまでに、アントワーヌはマニュエルに奇妙な、かつ興味深い命令をくだしている。アントワーヌの荒々しさ・凶暴さから若干話がそれるけれども、この箇所をとりあげることにしたい。アントワーヌはマニュエルと、以下のようなやりとりをしている。

「——さあ、(…) お前に復讐の機会を与えてやろう。いわゆる侮辱を血で洗うというやつを、ためしてみるがいい。(…) 石を拾え——うまく選ぶんだぞ——それから道を二十歩さがって、俺をねらうんだ、俺の頭にぶちあててみろ。

——でも、もしあなたを殺したら？　とぼくはたずねた。

(…)

——お前なんかこわくない、と彼は言った」(*Ce qui*, pp.356－357)。

アントワーヌはマニュエルに、自分の頭をめがけて石を投げるよう命じている。自分に向かって石を投げさせるというふるまいは、一見すれば、子どもじみた戯れとうつるかもしれない。とはいえ、「でも、もしあなたを殺したら？」とマニュエルが問うているところからうかがえるように、それは死への挑戦という意味をもつ。死に魅せられ、死の恐怖におそわれるアントワーヌにとって、マニュエルに投石させるということは、死の可能性あるいは死の危険に身をさ

らすことなのだ。そしてそうすることによって、アントワーヌは死の恐怖を克服し、さらには、死をも乗り越えたいと願っているのだと思われる。マニュエルはこのようなアントワーヌを前にして、こう考えている。

「(…) ぼくの前には、自分がもうだめだと思っている男が立っているのだ。自分じしんの運命を認識するということは、恐怖にたいしてなんという鎧になることだろう！おそらく彼は自分を不死身だと思っているのであろう。ぼくは、恐ろしくて忌まわしい死、＜彼の＞[103] 死が、彼を保護し、のちのために彼をとっておくために、彼とぼくとのあいだに置かれているような印象をいだいた」(*Ce qui*, p.357)。

マニュエルはまず、「ぼくの前には、自分がもうだめだと思っている男が立っているのだ」と考えている。「自分がもうだめだと思」うとはどういうことなのであろうか。おそらくそれは、死すべき運命からのがれられないと観念することなのであろう。ここから、アントワーヌの内心が死の想念に満たされていることがうかがえる。次にマニュエルは、「自分じしんの運命を認識するということは、恐怖にたいしてなんという鎧になることだろう」という感慨にふけっている。この感慨からは、生きるか死ぬかという岐路に自分を立たせることによって、死の恐怖に打ち克ちたいというアントワーヌの願いが読みとれると思う。それからマニュエルは、「おそらく彼は自分を不死身だと思っているのであろう」と推察している。この推察は、アントワーヌは「自分がもうだめだと思っている」という、はじめの判断と矛盾しているようにみえる。けれどもアントワーヌは一方では、死ぬという宿命を回避しえないと思いつつも、他方では、マニュエルの投石ぐらいでは傷つかないし、けっして死なないと確信しているということなのであろう。アントワーヌがそう確信しているからこそ、マニュエルの投石を待つという行為が死への挑戦という意味をもちうるのだと思われる。さいごにマニュエルは、「恐ろしくて忌まわしい死、＜彼の＞死が、彼を保護し、のちのために彼をとっておくために、彼とぼくとのあいだに置かれている」ような印象をいだいている。マニュエルは、アントワーヌと自分とのあいだに、死あるいは彼の死を見てとっている。その理由は、アントワーヌが死の想念もしくは死の恐怖にとりつかれているために、マニュエルの目には、彼がすでにして死の領域に足を踏み入れた存在にうつるからであろう。極論すれば、アントワーヌは死の想念と恐怖のために、マニュエルにとっては、死と同化した存在なのだ。だからこそ、マニュエルは、死がアントワーヌを「保護」しているように思うのであろう。とはいえ、アントワーヌはそれにもかかわらず生きている人間である。アントワーヌはいつの日にか決定的な死の瞬間をむ

かえなければならない。アントワーヌが死と同化した存在であることで、マニュエルは彼の死を看取するのであるが、その死が「のちのために彼をとってお」いているとマニュエルがみなすのは、アントワーヌがそれでも生きた人間であるからである。それゆえ、マニュエルのさいごの印象からは、死と同化しつつも、決定的な死の瞬間まで、死の想念と恐怖とともに生きなければならないアントワーヌの苦悩の姿が浮かび上がってくるのである。

以上、アントワーヌにおける死の魅惑と恐怖をもんだいにしてきた。そしてその過程で、アントワーヌの放蕩、荒々しさ・凶暴さ、および死への挑戦を検討した。この検討によって、アントワーヌの在り方あるいは行いはことごとく、死ぬという人間的現実と密接に関係していることが明瞭になった。アントワーヌはたえず死と対峙しつつ生きている人間なのである。

さいごに、『在り得たこと』の人物としてのアントワーヌが、マニュエルの日常生活の中のどの人物に対応しているかについて触れておきたい。アントワーヌ・フォンガロは次のような見解を表明している。

「年老いた城主の息子アントワーヌは、尊大さに満ち満ち、侮蔑的な態度をとり、荒々しい人間であり、恐れおののくマニュエルの顔を馬の鞭で鞭打つのであるが、彼は、マニュエルが勤めていた本屋の主人であるエルネスト氏の、より高貴な次元での置き換えである。エルネスト氏はマニュエルに恐怖と嫌悪しかいだかせない粗野な人物であり、マニュエルを召使のように扱うのであるが、マニュエルはこの人物を前にして、彼が荒々しい人間であるがゆえに、恐怖のために震えあがっているからである」[104]。

アントワーヌ・フォンガロは、荒々しく、恐怖をそそる人物であるということで、アントワーヌをエルネスト氏の「より高貴な次元での置き換え」とみなしている。たしかに、エルネスト氏とアントワーヌとは「荒々しい」(brutal)人間であるという点で共通性をもつ。しかしエルネスト氏には、アントワーヌのように、すぐさま暴力にうったえるような凶暴さはない。しかも、アントワーヌの内面を支配するような死の懊悩もみられない。アントワーヌにおける死の想念と恐怖を考慮するとき、アントワーヌはマニュエルの内心の苦悩を糧として形象化された人物であるとうけとれるのではないだろうか。ニコラス・コスティスもまた、アントワーヌを、「マニュエルじしんの死の概念にたいするもう一つの反応を肉体化したもの」[105] と解している。私たちは先に、たやすく肉体的欲求を充足することのできる人間であるという点で、アントワーヌがマニュエルの夢を投影した人物であるととらえた。結局、アントワーヌは、マニュエルの肉なるものへのあこがれだけでなく、死にまつわる苦悩をも結晶化した人

物であるといえよう。

註

89) 目次の１．に該当する部分は、『「幻を追う人」読解のこころみ(1)』、山口大学「文学会志」第46巻、1995、pp.58－71を、２．の(1)(2)にあたる部分は、『「幻を追う人」読解のこころみ(2)』、山口大学「独仏文学」第18号、1996、pp.97－112を、２．の(3)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(3)』、同「文学会志」第47巻、1996、pp.21－38を、２．の(4)(5)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(4)』、同「独仏文学」第19号、1997、pp.1－18を、３．の(1)(2)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(5)』、「文学会志」第48巻、1997、pp.113－128を、３．の(3)は、『「幻を追う人」読解のこころみ(6)』、「独仏文学」第20号、1998、pp.1－19を参照。

90) カッコ（＜　＞）はイタリック体で書かれていることを示す。

91) Jacques Petit: ≪Notes≫ pour *Le Visionnaire*, in *Julien Green, Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, t. II, p.1418.

92) Jean-Laurent Prévost: *Julien Green ou l'âme engagée*, Emmanuel Vitte, 1960, p.110.

93) この記述から、子爵夫人がジョルジュ夫人と同じ年齢であることがわかる。そしてマニュエルがジョルジュ夫人について、「夫人の髪が黒かったにもかかわらず、ぼくは夫人が五十歳だと推測した」（*Ce qui*, pp.324－325）と書いていることから、子爵夫人も同様に五十歳くらいだと推定される。しかしながら、この年齢は、『在り得たこと』の終わり近くで、子爵夫人がマニュエルと性の交わりを結ぶという事実を視野に入れると、少し高すぎるように思われる。さらには、父親の伯爵の年齢とも齟齬をきたしている。このことを今、明らかにしておきたい。マニュエルは、伯爵が死の最初の兆候を感じ、蟄居生活に入ったのは「五十二歳」のときだったと説明している（*Ce qui*, p.336）。この時点と、マニュエルが城にやってきた時点とのあいだには、どのくらいの時間のへだたりがあるのだろうか。この点にかんして、子爵夫人はマニュエルに、「二年前」に「父が最初の兆候を感じた」と言っている（*Ce qui*, p.331）。したがって、マニュエルが城にやってきた時点は、伯爵が死の最初の兆候を感じたときから二年後のことであるので、伯爵は五十四歳だということになる。また、子爵夫人の話にもとづかないで、伯爵の年齢を考えることもできる。伯爵は死の最初の兆候を感じてから、城に閉じこもり、「まる一年のあいだ」（*Ce qui*, p.337）、子どもたちを遠去け、それから子どもたちを城に呼びもどし、しばらくは子どもたちの面会をう

ける。しかし、ついには子どもたちの面会を拒絶し、小さな部屋にひきこもり、ジョルジュ夫人の世話だけで生きるようになる。では、伯爵が死の最初の兆しを感じてから、完璧な蟄居生活に入るまでに、どれくらいの月日が経っているのだろうか。このことについては、次の記述が決め手となる：「医者たちは、彼［伯爵］がこんなに長くもちこたえることに驚いていたが、降誕祭の頃にその死期を定めた。しかしその冬も前の冬と同じに過ぎ去り、病状が特に悪化したということもなく、美しい季節が再び訪れた。そこで二十ヵ月も前から苦しんでいるこの不幸な病人に同情したあとで、人びとは、自然の歩みは随分とのろいのだと考えるにいたった」（*Ce qui*, p.338）。ここでは、「二十ヵ月も前から苦しんでいるこの不幸な病人」というところが注目される。「二十ヵ月」という数字は、もちろん伯爵が死の最初の兆候を知覚した時点から数えられた数字である。そしてこの記述のあとで、伯爵が完全な蟄居生活に入ったと語られていることから、伯爵は死の最初の兆しを感じとってから二十ヵ月後、つまり一年八ヵ月後に、ジョルジュ夫人の看護をうけるだけの孤絶の生活に入ったことがわかる。では、ジョルジュ夫人が伯爵を世話するようになってから、どれくらいの歳月が経過しているのであろうか。この点については、この註釈を付けている引用文の中の、「彼女がネーグルテールで暮らしはじめてから、五年以上経っていた」というはじめの文が手がかりになる。「五年以上」（plus de cinq ans）という言い方はあいまいであるが、ごく普通に考えれば、六年未満のことだと推測される。ジョルジュ夫人ははじめ召使の地位に甘んじていたのであるから、夫人が伯爵の世話をするようになってから、多く見積もっても五年の歳月しか経過していないと思われる。そうすると、伯爵の年齢は、五十二歳に一年八ヵ月と五年をくわえて、五十八歳八ヵ月ということになる。あるいは「五年以上」という表現を、もっと幅をもたせて十年未満というふうに理解して（十年を越えれば十年以上という言い方になる。どれだけ幅をもたせても五年単位でしか考えられない）、十年間、ジョルジュ夫人が伯爵の面倒をみてきたと仮定すれば、伯爵の年齢は六十三歳八ヵ月だということになる。こうして伯爵の年齢が得られた。子爵夫人の言葉をそのままうけ入れれば、伯爵は自動的に五十四歳になるし、他の箇所を綜合しても、せいぜい五十八歳八ヵ月か、六十三歳八ヵ月にしかならない。しかしこの数字は決定的におかしい。なぜなら、子爵夫人は前述のように五十歳くらいと推測されるので、伯爵とその娘である子爵夫人とのあいだには、四歳か、もしくは八歳八ヵ月か十三歳八ヵ月しか年のひらきがないからである。これでは親子関係は成立しない。子爵夫人がマニュエルと肉体の交わりを結ぶには、年齢が少し高すぎるように思われることはすでに述べた。同様に、伯爵が「死者たちの恐ろしい威光」を放ち、周囲の者たちに死の恐怖をいだかせるには、少し若すぎるよう

にも思われる。いずれにせよ、伯爵の年齢と子爵夫人の年齢とはまったく折り合わず、少なくともどちらかの年齢にあやまりがあることだけはたしかなのである。『在り得たこと』を作成しているのはマニュエルなので、これはマニュエルの過失であるともいえるが、やはり『幻を追う人』の作者ジュリアン・グリーンの錯誤であるとみるべきだろう。数字の間違いは、綿密にプランを立てたうえで制作するのではなく、vision のおもむくままに書いていくといった作風に起因していると思われる。

94) ここでの「上がる」(s'élever) は、文字どおり地下室から上の方にあがっていくという意味で使われている。と同時に、地位が上がるという象徴的な意味もこめられている。

95) マニュエルは、ジョルジュ夫人のこのような在り方を、かなり早い段階から認識していたように思われる。すなわち、『在り得たこと』の舞台となるネーグルテールの城は、まったく架空の城ではなく、「塔」(Ⅰ−1、p.206)、「鳩小屋」(Ⅲ、p.388) といったような実在するものを媒介として想像されたのであるが、マニュエルは『在り得たこと』の制作に専念する以前、マリー＝テレーズに、城にまつわる話を折にふれて語り聞かせていた。第一部第一章でマリー＝テレーズは、次のように書いている：「ある晩、彼［マニュエル］はわたしに、見知らぬ女が城に現れたと告げた。偽善者のようなまなざしと蒼白い顔色をした、太った女で、召使のうち古参の連中は、この女が四年前から地下室の中の、石炭倉庫のそばでくらしていて、こっそりと養われていたのだと主張するのだった」(p.205)。ここで言われている「見知らぬ女」がジョルジュ夫人に結晶する人物であることはまちがいない。物語を本格的に作成する以前から、マニュエルの脳裡で、ジョルジュ夫人が成り上がる人物として夢想＝構想されていたことが、この記述からわかる。

96) また、子爵夫人はマニュエルに、ジョルジュ夫人が「時として、人間ではないように見えます」(*Ce qui*, p.368) と言い、「あの女がいるとき、ランプの火が弱まり、あるいは空がくもるような奇妙な印象をうけます」(p.368) と述べて、ジョルジュ夫人が不吉な存在であることを指摘し、そして喜怒哀楽をあらわさない夫人の瞳に言及して、ジョルジュ夫人が人間らしい感情とは無縁の存在であることをもんだいにしたあと、次のように語っている：「ふつう、愚かしさというものは笑いを誘います。しかしあの女の愚かしさはあまりにも深遠なので、笑いを誘いません。言ってみれば、あの女は愚かしさを大きくし、この宇宙の中で知られず、説明されていず、見抜かれていない一切のものに、夜の奥に隠れている一切のもの、暗闇の中でよろめき、びっこをひき、早口で口ごもる一切のものに、愚かしさを結びつけているかのような具合なのです。あの女は、死というものの超人的な愚かしさを備えているのです」(p.369)。

難解な文章であるが、要するに子爵夫人は、ジョルジュ夫人の深遠な愚かしさが、宇宙＝世界の神秘につうじているがゆえ、死の愚かしさであるとみなしている。子爵夫人の内心で、ジョルジュ夫人が死と同一化されていることは、これら一連の言葉からもたしかめられる。

97) Michèle Raclot: *Le sens du mystère dans l'œuvre romanesque de Julien Green,* Aux Amateurs de livres, 1988, t. I , p.83.

98) *Le Miroir intérieur, Journal VI*, 26 novembre 1954, IV, p.1373.

99) Antoine Fongaro: *L'Existence dans les romans de Julien Green,* Signorelli, Roma, 1954, p.134.

100) Nicholas Kostis: *The Exorcism of sex and death in Julien Green's novels*, Mouton, 1973, pp.73−74.

101) ここでは、伯爵は自己の病いの遺伝性について、アントワーヌの前で口をつぐむ配慮を見せている。しかし本文の引用文の二頁先には、次のような記述がみいだせる：「彼［伯爵］は子どもたちに、毎朝、前の夜の話を聞きにくるよう要求した。あたかも彼は子どもたちの健康を許せないかのようであった。というのも、苦しみによって性格をゆがめられない人間はいないからである。とうとうある日、彼は息子に、自分の病いの性質を説明し、遺伝の不当な法則のことをほのめかした。彼はそのあと、一種の怨みをはらすために言ってしまった言葉を後悔した。が、悪い種は良い土壌にまかれ、やがて芽を出すことになった」(pp.340−341)。この引用文では、伯爵がアントワーヌに、「自分の病いの性質を説明し、遺伝の不当な法則のことをほのめか」すことで、アントワーヌの内心に死の恐怖が芽生えたことになっている。いったい、この記述と本文の引用文とはどのように折り合うのであろうか。まず考えられるのは、本文の引用文とこの記述とでは、語られている時点がちがうのであり、時間の流れに位置づけるならば、この記述は本文の引用文のあとにくるという解釈である。このように解釈すると、アントワーヌは、父親への見舞いを重ねるうちに、死の恐怖をいだくようになったけれども、父親から病いの遺伝性を知らされることで、死の恐怖が決定的なものになった、ということになる。だがこの記述のさいごの、「悪い種は（…）やがて芽を出すことになった」という言い方は、死の恐怖の発生を暗示するものであり、死の恐怖が本格的になったことを示唆するものではない。それに本文の引用文と上の引用文とでは、伯爵の態度に若干の差違がみられる。本文の引用文では、伯爵は遺伝的な疾患にかんして沈黙をまもることで、息子アントワーヌにたいして父親らしい思いやりを示している。これにたいして、上の引用文では、伯爵は、健康を享受するアントワーヌへの「一種の怨み」から病気の秘密をばらし、息子を自らの不幸の道

連れにしようとしている。それゆえ、この二つの引用文において、伯爵の態度・性格に首尾一貫性の欠如、不統一がみられるように思われる。さらに、上の記述は、アントワーヌがしばらく自由を満喫したという記述のあとにつづくものであり、時間的にみて、伯爵が死の最初の兆しを自覚した時点からさほどへだたっていない頃のことをもんだいにしている。とすれば、本文の引用文も、上の引用文も、どちらも同じ頃のことを語っていると考えられ、二つの記述のあいだには大きな矛盾があると判断せざるをえない。アントワーヌにたいする伯爵の態度のくいちがい、アントワーヌが死の恐怖にとりつかれるにいたる経緯(いきさつ)の不統一は、やはり作品の欠陥であるとみなされる。

102) 伯爵が完全な蟄居生活に入ってからのこととして、ジョルジュ夫人はマニュエルに、アントワーヌが「まちに放蕩をしに出かけている」と主張し、マニュエルが「天国のように思いえがいていた或る種の家」にアントワーヌの姿が「みうけられる」と言いはっている (*Ce qui*, p.343)。

103) カッコ (＜　＞) はイタリック体で書かれていることを示す。

104) Antoine Fongaro: *L'Existence dans les romans de Julien Green*, pp. 134－135.

105) Nicholas Kostis: *The Exorcism of sex and death in Julien Green's novels*, p.72.